第3種郵便物認可

四季彩り

伝統から未来へ
～プライドからブランドへ～

元京都工芸繊維大客員教授
加納 剛太

京都で50年近く暮らす米国人の友人たちがいつも言う言葉がある。「In Tradition the Seeds that Inspire Changes」（伝統の中に変化をもたらす源泉がある）。新たな時代への変革の鍵は伝統の中にこそ息づいているという意味だ。初めて耳にした時、異国での長い暮らしで醸成された友人の言葉に感銘を受けたものだ。

さて、トランジスタの発明から75年が過ぎ、日進月歩の進化を遂げてきたデジタル社会も一つの節目を迎えた。次の節目に向け、量子メモリーやヘテロ集積技術などにより、人間の脳に似た機能を持つチップが実現されようとしている。今後ますますAI（人工知能）とIoT（モノのインターネット）が融合し、生活様式が大きく変容することは想像に難くない。

いまやデジタル技術は、新しい社会への足掛かりとなる有形の資産である。一方で、人類が歴史と伝統の中で創り上げた「無形の資産」にも新しい未来を創る源泉があるのではないだろうか。個人的には、そこにこそ日本復活の鍵が隠されていると感じられてならない。私が考える「無形の資産」とは「日本人がDNAとして持つ知性の変革への挑戦」である。かつて団塊の世代を中心とした日本経済界のリーダーたちが体現してきたことに着目してみよう。なぜ彼らが戦後の焼け跡から奇跡の経済復活を牽引することができたのか。おそらく「よい物を作る」「生活を豊かにする」といったプライドが息づいていたからだ。そして、これこそが経済の低迷やイノベーションの欠如といった今の日本から脱却するための処方箋となるのではないか。

京都に住んで30年が過ぎたが、この街は特別な存在感がある。教え子のシンガー・ソングライターは「京都からのイノベーション」で「時代に左右されず、昔のにおいをそこそこに感じさせるが、かといって時代錯誤というわけでもない。京都に生きた先達そして今生きる人々は、昔から続く京のDNAを無意識に受け継ぎながら新しい物を生み出している。それが街行く人たちに、伝統に立脚した知的な変革を感じさせるのだ」と歌う。その唯一無二の魅力があるがゆえ、京のプライドから生み出されたあらゆる文化が他地域の人々からブランドとして認知されている。

これはまた日本そのものを象徴するDNAかも知れない。欧米に比べて「日本人はイノベーションに向いていない」と言われるが、私はそれを否定したい。人生観の根底に「諸行無常」という変化を当たり前のものとする考えを持ち、「知行合一」という知識と行動を一致させる武士道精神を倫理観として身につけ、長い歴史の中でたびたび襲ってきた危機を英知で乗り越えた日本人にイノベーション能力がないとは言えない。おそらく足りないのは勇気と胆力と覚悟であろう。

人生を積み重ねたゆえに知覚できるこうした無形の資産を掘り起こし、次世代に伝えていくことも私たち高齢者の役目ではないだろうか。

かのう・ごうた　1938年、兵庫県生まれ。大阪大卒業後、松下電器産業入社。松下電子工業常務などを歴任。高知工科大名誉教授。米シンメトリックス取締役顧問。